令和4年度 自己評価表（最終評価）

鳥取県立鳥取西高等学校

教育目標	藩校「尚徳館」の「文武併進」の精神を受け継ぎ、高い志を持ち、幅広い教養を身につけ、社会の進歩・発展に貢献する創造性豊かな人間を育成する。
中長期目標	1 生徒が学問の意義に目覚め、深く学ぶことの喜びを実感できる質の高い教育を推進する。 2 生徒が確かな学力を身に付け、自己の将来像を描き、進路目標を実現できる教育を推進する。 3 生徒に良識を培い、自律と規範、自立と共生の精神を涵養することによって、社会のリーダーとなる素養を育てる。 4 教科の学習とともに、部活動や学校行事等の体験的活動への積極的参加を通じ、知徳体のバランスのとれた人間の育成を図る。

今年度の重点目標	『深い学び』『幅広い学び』を通じて新時代を創造するリーダーの育成を図る ① 学問の奥深さに触れ、深く学ぶことの喜びを実感できる授業を研究・実践する。 ② 生徒が高い進路目標に挑戦しその目標を実現できるよう、戦略的に進路指導を進める。 ③ SSH事業やSGH関連事業を組織的に推進し、科学技術系人材やグローバル人材の育成を図る。 ④ 生徒の良識を培うと共に、挨拶を含め生徒の社会性を高める。 ⑤ 部活動に積極的に参加し上位大会を目指すと共に、スポーツ・文化芸術等各種大会・コンクール等へも積極的に挑戦する。
----------	---

評価基準 A:十分達成〔100%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕

年度当初				評価結果			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
深く学ぶことの喜びを実感できる授業の研究・実践	○学問の奥深さに触れられるような授業実践 ○協同的・対話的な学習、ICTの主体的な活用 ○SSH(スーパーサイエンスハイスクール)／SGH(スーパーグローバルハイスクール)事業の推進、課題研究の実践と改善	○生活評価アンケートで「授業や各種の行事により教養や関心の幅が広がった」生徒が91%、「自ら学ぶ意欲が高まっている」生徒が87%である。 ○授業アンケートで「授業で学びが深まった」とする生徒が83%である。 ○ICTを活用した、協同的・対話的な学習の授業研究に取り組んでいる。 ○SSH等の各種プログラムにより課題研究が充実し、体系的な取組が進んできた。また、ESD(持続可能な開発のための教育)やSDGs(国連開発目標)等の視点による、対話的・探究的な学びが実施されつつある。	○生活評価アンケートや授業アンケートで学校での学びの充実に肯定的な回答が前年度と同等の高い値を維持している。 ○Chromebook等の情報端末が全ての授業で効果的に利用されている。 ○ESD等の視点からの対話的・探究的な学びにより学問の奥深さに触れる質の高い課題研究が展開され、生徒の科学的な素養が高まり、グローバルな視野で物事を考えている生徒の割合が増加している。 ○SSH等の研究開発を有効に活用した、主体的に知的活動に取り組める課題研究や各種の研修プログラム等が充実している。	○授業見学の取り組みを通して、同一教科だけでなく他教科の取組から学ぶ機会を増やし、教科横断的な取組の推進を図る。 ○SSH等の研究開発を通して、課題研究の取り組みを推進し、生徒の主体的な探究学習を深化させる。 ○課題研究メソッドやICT機器を活用して、課題研究の方法を習得させる。課題研究における生徒へ指導が丁寧に行えるようにし、論文やポスターの質的向上を図る。 ○生徒間で Chromebook の利用について教えあう雰囲気を作り上げる。それにより、ICTの活用と生徒の自主性の両立を図る。	○生活評価アンケートで「授業や各種の行事により教養や関心の幅が広がった」生徒が89%、「自ら学ぶ意欲が高まっている」生徒が87%、授業アンケートで「授業で学びが深まった」とする生徒は79%。 ○授業見学の実施状況は低調であった。 ○SSH等の研究開発を推進し、全教職員が積極的に生徒の課題研究を指導・支援して、課題研究の取組が前進した。3年生研究論文などでの質的向上がみられた。 ○学力二極化の傾向が伺える。 ○1年の各教科や課題研究で Chromebook が積極的に利用されるなど、ICTの活用が進んでいる。	C	○授業見学の実施方法については見直し、再考が必要。教科、科目間の連携がより活発に行われるような取り組みを検討する。 ○授業研究会は継続したい。公開授業実施者の選定をもっと早い時期から始めたい。 ○生徒の海外派遣が広がる見込みであり、社会の変化に対応しながら研修プログラムを実施する。 ○学力が極端な二極化にならないように各教科で分析、対応を進める。 ○Chromebook等ICT機器の効果的な活用に継続的に取り組む。
進路目標の設定と、その実現に向けた確かな学力の育成	○面接・キャリア教育の充実 ○戦略的な進路指導の実施	○年に4回の面接旬間を設けているが、その期間以外にも面接が実施され、進路や学習、学校・家庭生活などについてのきめ細かい指導がおこなわれている。 ○面接指導や自宅学習時間調査、各種調査を通して、生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成に努めている。 ○キャリアパスポートの活用等、キャリア教育への取り組みが不十分で、進学実績も目標を大きく下回った。	○面接で、生徒の意欲や自習性が高まるような効果的な指導が行われている。 ○図書館ガイダンス等により、情報収集や情報・思考の整理等、思考の深化を図る活動を体系的に行えるようになっている。 ○生徒や保護者に必要とされる進路決定のための情報が十分に提供されている。 ○進路指導シラバスやキャリアパスポートの活用により、進路目標を維持し自律的に学習に取り組む生徒が育成されている。 ○大学合格者数が国公立大学230名、難関10大学・医学科60名を超えている。	○きめ細かい面接指導を継続するとともに、教科会や学年会での情報共有を進め、生徒の進路、学習および生活について協調した指導を行う。 ○自宅学習時間調査を、より高い進路目標の維持・達成のための指導に活用する。 ○キャリアパスポートに進路研究内容をファイリングし、自己分析・自己実現に繋げる。 ○進路決定や大学入試に向けた情報発信を積極的に進める。特に変更点の多い2025年度情報については重点的に情報収集・提供をおこなう。	○面接期間を軸に生徒個々の状況に応じた丁寧な面接指導が行われている。 ○図書館ガイダンス・情報活用ガイダンスの内容を一層充実させ、資料提供及び各種情報発信を適宜行った。 ○キャリアパスポートに2年研修旅行やふるさとキャリア教育講演会の振り返りを取り入れ、活用が進んだ。 ○PTA進路委員会作成のビデオ研修が有効に機能した。 ○総合型選抜・学校推薦型選抜入試に例年よりも多くの生徒が向かい、合格した。	B	○面接期間になるべく会議などを入れないような配慮を続ける。また、各期間の取り組み主題を明確化し共有する。 ○情報発信や各種ガイダンスの充実、情報提供等、積極的な図書館の利用促進を今後も継続する。 ○総合型選抜・学校推薦型選抜入試に向けて、担任は早めに生徒面談を行い志望を確認する。特定の教員の負担増にならないよう学年団と進路指導部で連携を強化する。
良識を培い、社会性を高めるための指導の推進	○自主・自律的な学校生活、自発的な挨拶の習慣 ○地域・社会との良好な関係を醸成 ○互いを思いやる心の涵養	○「一人ひとりが規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」との回答は91%、「一人ひとりが人権の尊重された学校生活を送っている」とする割合は95%。 ○挨拶をする生徒が増えてきたが、自ら挨拶する生徒は多くない ○保護者と学校の連携のもと、多くの生徒が節度と良識のある生活を送っているが、自転車マナーや情報モラルについては継続的な指導が必要である。 ○HP・SNSも用いて情報発信を進めているが、保護者への浸透については改善の余地がある。	○「規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」生徒の割合(アンケート)が90%以上を保っている。 ○生徒同士や教員・来校者への挨拶が自然にできるようになっている。 ○生徒が社会や地域への関心を持ち、学習活動が自分の生活や進路目標に結びついていることを実感しており、通学マナーや情報モラルが守られている。 ○LHRや人権講演会などの人権学習だけでなく、日常生活の中で人権や差別について考え、自他の人権を尊重しながら多様な人間関係を作る取り組みが実践できている。	○規則の意味を理解させるとともに、挨拶の励行など、マナーを身につけた生活ができるよう、きめ細かな声掛けを行っていく。また、情報モラルを基本的な生活習慣の一つとして身につけさせる。 ○あいさつ運動等の機会に、様々なマナーについての啓発運動も併せて行う。 ○西高だより等でHP・SNSでの情報発信についてPRし、その逆もおこなうことで保護者に確実に情報が伝わるように努める。学校と保護者相互の連携協力と信頼関係の構築を図り、教育力を高め、生徒の社会性を育み、人間関係作りをサポートする。	○「一人ひとりが規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」との回答は90%、「一人ひとりが人権の尊重された学校生活を送っている」とする割合は94%。 ○多くの生徒が節度と良識のある生活を送っており、自発的に挨拶をする生徒も増えてきた。 ○自転車マナーや情報モラル、スマホ利用についての問題が散見される。 ○生徒を中心に服装や頭髪など身だしなみについて話し合う等の活動を行った。 ○「保護者へ情報が迅速かつ適切に提供されている」と回答した保護者は60%。	B	○保護者と学校が連携協力しながら、挨拶、マナー、情報モラル、交通ルール等、基本的な生活習慣や規則について継続的に指導し、生徒の人的成長を多方面から支援する。 ○生徒への適切な指導や支援ができるよう、スピード感をもって情報を共有する。健康観察の意義を再度伝え、徹底に努める。 ○生徒の日常生活の些細な変化を見逃さず、日々保健室・相談室や学年、担任との連携を密にする。
部活動や体験的活動、対外的な大会や発表会等への積極的な挑戦	○部活動への積極的取り組み ○部活動以外の各種体育・文化・芸術活動等への参加 ○対外的な学術研究会、発表会等への参加の促進	○県大会ベスト4以上の運動部活動は12、中国大会以上の文化部活動は8だった。 ○各種研究会・学会や大会等に参加した生徒数は238人、そのうち上位入賞者数は41人だった。 ○授業での活動を対外的な評価につなげている教科もあれば、部活の成果として好成績を収めている取り組みもある。	○多くの生徒が運動または文化部活動に参加し、大会結果も前年度以上の成果を挙げている。 ○部活動の枠に囚われず、生徒各々が自分の熱中することに真剣に取り組んでいる。また、それを評価し後押しする意識が職員間で共有されている。 ○各種研究会・学会、グローバルサイエンスキャンパス(GSC)やサイエンス系のイベント、校内セミナー等に参加する生徒人数が昨年度より増えている。	○部活動と学習活動やキャリア教育が相乗的効果を生むような指導に心掛ける。 ○各種研究発表会やサイエンスイベントに関する情報を分かりやすく提示し、生徒が段階的に参加できる環境を整える。 ○各種発表会・学会等の発表会や各種研究会・学会等に参加して得た成果を校内発表会や授業を通じて多くの生徒にフィードバックし、生徒の研究活動の啓発につなげる。 ○大学教授、社会人講師等の活用、県立博物館、図書館等との連携を積極的に進める。	○各種研究会・学会や大会等に参加した生徒数は258人、そのうち上位入賞者数は46人。鳥城AOSを4月と2月に開催、地元小学校での実験講座を実施、多くの外部講師を活用した。 ○教科での取り組みに加え、スポーツ科学や防災・減災分野への挑戦、地域連携など多くの活動を実施できた。 ○多くの生徒が部活動に参加している。兼部する生徒も多くなっており、多様な活動に取り組む中で経験を積み重ねている。	B	○参加生徒数や入賞者数から積極的な参加状況や成果が見られる。この流れをさらに大きくするため、更なる活動の広がりや深まりを目指す。研究内容は質的に向上しているため、現在の取り組みを継続し充実させる。 ○今後も生徒の各種活動への参加を推進し、支援や情報提供を継続する。 ○HRや教科担任と部活動顧問の情報交換により、活動に取り組む生徒へより効果的な言葉かけを行っていく。
業務改善の取組	○業務の効率化、簡素化 ○長時間勤務者の解消	○会議が連日開催される時期がある。 ○昨年度時間外業務時間45時間／月超の職員が月平均5.3人、360時間／年超の職員が15人となっている。 ○部活動の時間外指導時間30時間／月超の職員が延べ20人となっている。	○必要のある会議が短時間で効率よく行われている。 ○時間外業務時間45時間／月超の職員が月平均5人未満、360時間／年超の職員が10人未満となっている。 ○部活動の時間外指導時間30時間／月超の職員が延べ10人となっている。	○会議の精選、および実施方法の工夫(書面開催等)に取り組む。 ○ICTを活用し、業務効率化を推進する。 ○時間外業務が多くなりそうな職員に声をかけ、事情を聞きながら縮減策を検討する。 ○部活動計画表を確認し、計画の修正を依頼することで時間外指導時間の縮減を図る。	○職員会議の口頭連絡・報告を極力書面で代替し、他の会議も適宜書面開催とした。 ○時間外業務時間45時間／月超の職員が月平均11.1人、360時間／年超の職員が20人となっている。(2/7現在) ○部活動の時間外指導時間30時間／月超の職員が延べ35人(1月末現在)だった。	C	○職員会議運営方法の一層の工夫、改善、各種会議の書面開催を推進する。 ○退勤目標時刻を設定する日をつくる等、時間外業務時間の縮減を図る。 ○時間外業務時間の個票配布、退勤目標の設定等、縮減推進の依頼を継続。 ○計画表を点検し、勤務時間外の部活動指導時間縮減の依頼を継続する。